

氏 名	コガ ガ ウミ ト 古 賀 海 人
学 位 の 種 類	博 士 （文化財）
学 位 記 番 号	博 美 第 381 号
学位授与年月日	平 成 24 年 3 月 26 日
学位論文等題目	〈論文〉京都松尾寺所蔵 国宝『普賢延命菩薩像』における表現技法に関する研究－銀を中心とした截金技法について－ 〈作品〉京都松尾寺所蔵 国宝『普賢延命菩薩像』想定復元模写
論文等審査委員	
（主査）	東京芸術大学 教 授 （美術学部） 宮 廻 正 明
（論文第 1 副査）	〃 客員教授 （ 〃 ） 有 賀 祥 隆
（作品第 1 副査）	〃 准教授 （ 〃 ） 荒 井 経
（副査）	〃 教 授 （ 〃 ） 藪 内 佐斗司
（ 〃 ）	広島市立大学 〃 北 田 克 己

（論文内容の要旨）

京都・松尾寺所蔵、国宝の「普賢延命菩薩像」（以下、松尾寺本）は、増益（五穀成就・福寿増長）や延命などを祈願する普賢延命法の本尊としてまつられた画像で、普賢延命法は、特に天台宗においては四大法の一つとして重要視されるほど主要な修法であったと考えられる。延命を願う修法として、人の生死に関わる普賢延命法の尊像には、金素材のようなきらびやかな荘厳ではなく、むしろ銀素材にみられる白を基調とする落ち着いた光輝表現が求められるようになる。本図には、銀箔の上に金箔を焼き合わせ、銀色に淡い黄味を帯びた柔らかい色調をもつ箔の使用が随所に認められる。このような多様な表現は、画像に奥行きと複雑さをもたらすが、取り分け金の下層に銀を合わせた箔を用いる截金は、截金全体の効果を一層際立たせる役割を果たしている。特に本図では、この合わせ箔が効果的に用いられていることに注目したい。

この松尾寺本は平安時代後期に制作されたと考えられるが、他の普賢延命菩薩像の尊像と比較しても、その像容の優美さ、彩色・截金文様の多様さ等の点で抜きん出ており、卓越した美意識を感じさせる。本図は、耽美的な彩色と様々な截金技法をうまく調和させ、院政期の貴族的な嗜好を表現した貴重な作例であるといえる。とりわけ金属材料と彩色下地にみられる技法や、截金の色調を変化させている点など、尊像が持つ絵画的側面に、截金が持つ装飾性が重なりあって見事な効果をあげている。

しかしながら、銀素材の多くは空気中の微量な要素の影響を受け徐々に変色する事がある。松尾寺本もまた、経年変化のため銀截金の黒変が顕著に現れており、そのほとんどが光輝を失っている。菩薩像を取り囲む光背に施された銀截箔や白象に用いられた銀箔、菩薩像の花飾りに使用されている銀泥も黒変しており制作当初の様子をうかがい知る事ができない。また背景の下地となる彩色も、現状ではほとんどが褐色に退色しており、周囲に置かれた銀截金や他の彩色との効果を確認することは困難である。特に銀截金は、制作当時の光輝した白色から、光を吸収する黒色に変化したことで、当初の制作意図とはまったく異なる状態へと変化してしまっている。そこで本研究では、復元模写によって当時の状況を再現し、視覚的に提示することによって、松尾寺本の当初の制作意図を探り、多彩な装飾性や美意識を持つ院政期仏画の荘厳の多様性を検証することを目的とする。

銀箔や有機染料は経年変化を免れない材料であるが、平安仏画においては彩色の一部として一般的に使用されており、松尾寺本にも多く用いられている。そのため銀截金と彩色の間にみられる荘厳な截金

技法や、そこから生まれる視覚効果を検証することは平安仏画研究において重要なことであり、想定復元模写を通して本研究を進める意義は大きいと考える。

本図と比較検証する図像は、像容では他の普賢延命菩薩像、截金や彩色では平安後期仏画を対象とする。像容では松尾寺本の光背における特異性を中心に、銀截箔の役割を経典を用いて述べる。技法面に関しては、本図と同時期に制作された三幅の図像を取り上げる。東京国立博物館所蔵「虚空蔵菩薩像」は主に光背と身光にみられる截金技法について検証し、截金の色調や下地との関わりについては、京都・神護寺所蔵「釈迦如来像」と京都国立博物館所蔵「十二天像」に注目し考察する。上記の比較検証を実施することで、松尾寺本をはじめとする平安後期仏画の截金技法を再確認し、制作年代を探る上で基準となる一つの指標を示すことが可能となる。

松尾寺本の現状調査として、目視調査や赤外線写真、実体顕微鏡写真を用いて描線を捉え像容の情報収集を行う。目視調査は、使用顔料の推測や像容解明だけに留まるだけでなく、本図がもつ絵画としての表現の特徴を分析することにも重点を置く。さらに制作者側からの視点に立って、どのような美意識をもって、制作したのかを観察する。それは、ひいては本図に使用されている銀截金の効果を探ることに繋がると考える。また、本図の特色でもある金の下層に銀を合わせた箔は製法や性質において不明な点が多く、箔の焼合わせや加速劣化試験を行うことでそれらを明確にすることが目的である。

平安後期仏画の截金技法、彩色の特徴としてよく知られた〈紺丹緑紫〉の配色や〈地文截金—主文彩色〉の形式とならぶであろう新たな手法を本研究では提示する。すなわち〈暖色系下地—金の下層に銀を合わせた箔〉〈寒色系下地—金箔〉という截金技法と彩色の関係が、平安後期仏画の特色として指摘することが可能であると考え。松尾寺本含め、京都・神護寺所蔵「釈迦如来像」や京都国立博物館所蔵「十二天像」、この三つの図像に関わる絵師、特に截金師には共通した意識が存在していたことが考えられ、平安後期仏画の特色でもある中間色に呼応した結果であると感じている。金と銀の中間色の截金、それは平安後期仏画にみられる成熟した截金技法と優美な彩色が生んだ固有の表現技法である。松尾寺本の光背に使用された銀截箔は本図における光輝表現の一部であり、想定復元模写を行った結果、白色に光を付随させた截箔を散らすことにより菩薩像との距離を感じさせることが可能となった。銀の効果は、白色の月輪の役割を担っている他、空間表現も備えていることが実証できた。以上のことから平安後期仏画において銀を取り巻く截金の表現は、多様な装飾美の追求から発現したものであり、更に幽遠な表現を求めた結果であることが言え、死生観を重んじた落ち着いた光輝表現と、平安後期にみられる荘厳性を内包した美意識を、再確認することができたものと考え。

(博士論文審査結果の要旨)

本論文は、平安時代後期（12世紀）に制作された京都・松尾寺所蔵の国宝「普賢延命菩薩像」にあって多用されている銀を中心とした截金技法、就中、銀箔の上に金箔を焼き合わせ、銀色に淡い黄色を帯びた柔らかい色調をもつ「合わせ箔」の使用が随所に認められることに注目し、それらが下地の彩色との関係で使用されていることを明らかにし、さらに黒変化した銀を当初の白色の銀に置き替え、想定復元模写を制作する過程を論述したものである。

本論文は、1. 研究概要 2. 平安後期仏画における截金技法について 3. 調査および実験 4. 銀を中心とした截金技法 5. 想定復元模写 6. 総論で構成される。特に「銀を中心とした截金技法」のうち、「截金と彩色下地との関わり」において、朱・丹などの暖色系下地には〈金の下層に銀を合わせた箔〉、群青・緑青などの寒色系下地には〈金箔〉を使用する法則性のあることを指摘し、さらに白緑・丹具・朱具など具色（中間色）では銀箔2枚を使用していることを見究め、当代の平安仏画とも比較、検証し、想定復元模写することで実証したことは意義深く、今後、截金技法の研究に新知見を示したことは高く評価される。

(作品審査結果の要旨)

本作品は松尾寺所蔵国宝「普賢延命菩薩像」の彩色表現を想定復元した模写である。申請者は特に金属材料や染料を用いた彩色技法に着目しており、論述では表しきれない光沢や反射、透明感といった彩色表現を模写作品によって明瞭に復元したと言える。変色の起こりやすい銀表現や褪色しやすい染料による表現は平安仏画に広く用いられてる造形であるにもかかわらず、その性質から研究が遅れてきた。原本と同質の材料を用い、材料相互の関係性までを総体として提示した本作品は、今後の当該分野の研究に大いに貢献するものとして高く評価できる。

(総合審査結果の要旨)

銀素材の多くは時代と共に変色し易く、描かれた当時と大きく印象が異なる。今回取り上げた松尾寺所蔵「普賢延命菩薩像」も経年変化のため銀截金が黒変し、光沢を失ってしまっている。菩薩像を取り囲む光背に施された銀きりがね、白象に用いられた銀箔、菩薩像の花飾りの銀泥も全て黒変し当時の状況を知る事はできない。また背景の彩色も褐色に退色しており、周囲に描かれた銀截金や他の彩色との効果を確認する事もできない。そこで今回、復元模写をすることにより当時の状況を再現し多彩な装飾性や美意識、院政期仏画の荘厳性を再現検証することができた。その結果銀箔を散らすことにより菩薩像との距離感を実際に認識することができ、多様な装飾美の追求から生死観を重んじた光輝表現を体感することが可能になった。これは、博士過程で習得した截金の技術や目視による経験値が大いに生かされた、本学独自の研究成果として高く評価される。

今後松尾寺「普賢延命菩薩像」の研究を進める上で、今回行った再現模写は貴重な資料として有効に活用される。